近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

AKINDO委員会

三方よし（さんぽう よし）

第10号
1998／8

CONTENT

特集　近江商人関係書籍紹介……………………………… 2〜3
新シリーズ「戦国の武将　蒲生氏郷と商人（あきんど）(1)」…… 4〜5
近江商人活躍の舞台⑥　川越……………………………… 6
茨城滋賀県人会の発足／金言名句⑩……………………… 7
催し案内／てんびん棒……………………………………… 8

川越のまちには、
今も多くの近江屋が存在する。
その中のひとつ、
天保十年創業の「近滝」は
蔵の町通りのお洒落な器の店。

三方よし　「三方よし」は近江商人共通の経営理念。「売手よし　買い手よし、そして世間よし」の精神で地域社会に大きく貢献した。本紙は近江商人を代表する理念を表題としている。

特集

近江商人関係図書

日本の経済状況が混迷する時代、改めて近江商人の商法やその経営が見直されています。江戸時代の不況期に全国各地で活躍し、多くの豪商を生んだ近江商人のその商法には、現代にも通じる多くの示唆を含んでいます。本号では近江商人関係書籍を一挙に紹介し、読者の皆様のご参考にしていただくことを願っております。

(注)発行後、かなりの時間を経た出版物はすでに絶版になっているものもあります。入手可能な本については定価を付記しています。

■創作・小説

『近江商人魂(上)(下)』
童門冬二 著
学陽書房発行　680円

天下取りの苛烈な時代を背景に、「信用」第一の着実な歩みが生み出す世界を切り開いていった西野仁右衛門と、目まぐるしい闘争が繰り返される権力の世界に生きた蒲生氏郷の生涯を通して、現代日本人の生きかた、経営のあり方を問う長編小説。

『金持一代起請文』
小倉栄一郎 著
言叢社発行　非売品

日野の豪商中井家の会計の研究に長年携わってきた著者が、中井良祐源左衛門の人柄を投影して、学術論文では書けない行動のはしばし、家族関係、人間関係を小説としてあらわしている。有名な「金持一代起請文」はすべて良祐の体験から出た経営哲学と言い切る著者の思いが伝わる。(非売品)

『筏』
外村繁 著
サンライズ出版発行　2039円

徳川末期の経済政策の波に揉まれながら商圏を拡大していく近江商人の意気盛んなさまを描写。第9回野間文芸賞受賞。

『草筏』
外村繁 著
サンライズ出版発行　2000円

近江商人の家に生まれた著者の体験的「商店もの」の第1作。池谷賞受賞、第1回芥川賞候補作品

『花筏』
外村繁 著
サンライズ出版発行　2000円

商業資本から金融資本へと移りゆく昭和初期。『草筏』に続く次代を近江商人の家を中心として商業の変遷を描写。家を中心とした商いの形が崩壊していく様子をうかがうことができる。

『お上にたてつき候 ―近江商人たちの熱き闘い』
丹波　元(はじめ) 著
PHP研究所発行　1800円

封建時代の特色である、お上からの偏った押しつけ行為に対して極めて反権力的であった近江八幡の町人は、天下の動静に影響を与えるほどの、豊富な資金力と個人の強い倫理感があった。突如、八幡の町に起こった幕府の査察を巡って、商人たちが武家社会に対して敢然と立ち向かっていく様が描かれている。八幡商人の当時の状況を知る好書でテンポがよい。

『小野組物語』
久保田暁一 著
かもがわ出版発行　2400円

明治維新時に三井組とともに、政府の御為替方として活躍し、第一国立銀行を創設した高島出身の大商人であった「小野組」。その小野組の生成と発展と崩壊のプロセスを現代人に語りかけている。小野組発祥の地で創作活動を展開する著者ならではの力作。

『近江商人』
邦光史郎 著
日本経済新聞社

■研究・一般教養書

『近江商人』
朝日新聞大津支局編
かもがわ出版発行　1500円

平成3年に開催されたあきんどフォーラムの開催を前に、滋賀県および滋賀県出身者で第一線で活躍している経営者の素顔を「現代の群像」として朝日新聞滋賀版との連載と併せて北海道での近江商人の活躍した現場の克明な取材を含めた近江商人の軌跡と系譜が書き下ろしで収録されている。

『近江商人物語』
島　武史 著
国書刊行会発行

神奈川県で老舗物語を執筆中に知り合った近江商人の末裔の方との出会いが、著者の近江商人への興味となり、滋賀県内での取材を紀行文風にまとめて現状分析と著者の私見が織り混ぜられている好書といえる。

『売り手よし　買い手よし　世間よし』
渡辺一雄 著
実業之日本社　1600円

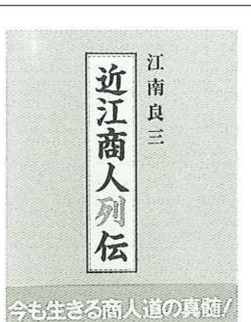
大丸百貨店での勤務の経験をいかした著作が現場に則した著書として定評のある著者が、近江商人の三方よしの理念はあきないの原点であることを力説している新刊書

『近江商人幕末・維新見聞記』
佐藤誠朗 著
三省堂発行　5000円

近江商人小杉甚蔵が元治元年から明治30年までを庶民の眼で綴った「見聞集」を解読した貴重な書籍で、幕末から明治維新、さらに新しい時代へと大きく社会が変遷する中で、冷静な判断で時代の推移を見つめている近世庶民世界のひとつの到達点がみられる。

『近江商人列伝』
江南良三 著
サンライズ出版発行　1800円

江戸時代から明治時代にかけて活躍した山形屋、高島屋、丸紅など近江商人30の商家の事歴を詳述し、商道の哲理を追求している。各商家の初代からの経歴が詳細な調査で記載されているので、各商家の系譜がわかりやすい。



『続　近江商人列伝』
江南良三 著
サンライズ出版発行　1800円

『近江商人列伝』に続いて、さらに160家の近江商人の商家の家歴、家憲、家訓、店則、掟書などを詳述している。

『近江商人の理念 ―近江商人家訓撰集―』
小倉栄一郎 著
AKINDO委員会発行　1000円

平成3年に開催されたあきんどフォーラムの記念品として発行。近江商人の家に残る家訓の中から代表的な部分を抜粋して、家訓のもつ意義を解説し、全体として近江商人の経営理念が理解できるように組み立ててある。

『近江商人の商法と理念』

AKINDO委員会編
AKINDO委員会発行　送料(二〇〇円のみ)

近江商人関係年表や近江商人に関する資料館などの資料が掲載され、近江商人に関する概要を紹介している。発祥、商法、理念、女性の生活などもコンパクトにまとめられ、多くの写真資料が掲載されている。

『江州人』

毎日新聞社編
毎日新聞社発行

昭和36年4月から12月まで、毎日新聞滋賀版に114回にわたって連載されたものを、全面的に改訂補筆を加え「近江商人」をクローズアップしてまとめられ、当時の商業的読本的性格を兼ね備えている。後に時代小説を多く執筆した徳永真一郎氏が大津支局長時代に発行されている。

『近江商人』

渡辺守順　著
教育社発行　1030円

産物廻し等の独自の商法に徹し、全国的に進出を図った近江商人の系譜、その風土、商法、商魂を浮き彫りにする近江商人を解説する入門書。

『近代近江商人経営史論』

末永國紀　著
有斐閣発行　7500円

著者は、近江商人の多彩な活動の特徴は広域志向性で、現代日本経済のあり方の先駆的活動であるとし、代表的な商人の創業期を比較したり、大陸で活躍した近江商人をとりあげている。さらに経営手法の限界や転換など、近代の近江商人の経営実態をより詳細に解き明かしている。

『商魂』

京都新聞社編
京都新聞社発行

昭和46年4月から翌年11月までに490回にわたって掲載された連載企画で、消費レジャーの風潮が進み、「使い捨て」の時代に、節約こそが日本経済を左右するカギであると、日本人への警鐘として企画された。当時の商社の首脳への取材を集大成している。

『近江商人の系譜』

小倉栄一郎　著
日本経済新聞社発行

全国的流通網と西洋の複式簿記に匹敵する会計システムを確立し、明治以降の近代化に大きな役割を果たした近江商人の活躍を、その人物と経営の側面から捉える。巻末に近江商人滋賀県出身で他府県に所在する商工業者のリストを掲載。

『江州商人』

江頭恒治　著
至文堂発行

著者の前書『近江商人』の加筆増訂版。「近江商人」ではなく、敢えて「江州商人」と題することにこだわりをみせた著者の姿勢の中に、新しい研究成果が読みとれる。

『小野組始末記』

小野善太郎　著
青蛙房発行

小野善太郎は、井善三家の助次郎家の四代目にあたり、著者が晩年に小野組破綻の始末を中心に思い出をしたため手記『回顧七十年』を内容とし、著者の遭遇した維新前後の小野家の歴史が綴られている。

『小野組の研究』(全4巻)

宮本又次　著
大原新生社発行

それまで、幻の財閥として、その具体像が刻まれていなかった小野組の興亡過程の大様を経営史と社会経済史の視点から明らかにした全四巻からなる大著。小野組研究者にとっては不可欠の学術書である。

『変革期の商人資本』
—近江商人丁吟の研究—

丁吟史研究会編
吉川弘文堂発行

近江国愛知郡に本家を構え、江戸と京都・大坂に出店をもった近江商人「丁吟」の発展過程を通して、幕藩制社会から近代日本社会への変革期における商人資本の活動とその性格を鋭角的に分析した研究論文。

『近江商人の経営』

小倉栄一郎　著
サンブライト出版

会計学の専門家である著者が、近江商人関係の研究書をベースにさらに、一般の人が理解できる内容として丁寧に記述されており、近江商人関係図書としては、空前の発行数となり、現代のビジネスマンに称賛された。

『高島商人』

駒井正一　著

琵琶湖の西岸、高島から発生した高島商人については、空白であることが多く、また本書のサブタイトルに掲げられている謎に包まれた部分も多い。これら、高島商人の空白と謎が、著者の克明な調査に基づいて説き明かされている。

『近江商人の経営管理』

小倉栄一郎　著
中央経済社発行　1800円

資本意識を明確にすることで江戸時代の早い時期に、日本の近代化を推進した近江商人の特質と、単なる商人ではなく、産業の中に入り込み、企業家として研究開発に自ら従事した近江商人の特質を明らかにしている。

『近江商人の金言名句』

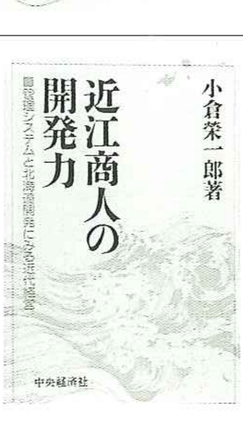
小倉栄一郎　著
中央経済社発行　1600円

近江商人が言い遺した家憲・家訓・遺訓・店則など味わい深い言葉を通して、近江商人の経営哲学の精神に迫った好書。

『近江商人の開発力』

小倉栄一郎　著
中央経済社発行　1600円

近江商人が、その優れた組織力をもって作り上げた分権管理システムと400年にわたって続けた北海道開発のまぎれもない本筋を概説し、その先見力を明らかにしている。



『近江麻布史』

渡辺守順　著
雄山閣発行

近江商人が持ち下った商品の代表的な麻布。その歴史と製法などをまとめた大著。近江商人の研究家でもある著者ならではの著作である。

『江州中井家帖合の法』
小倉栄一郎　著／ミネルヴァ書房発行

『近江商人の経営遺産』
安岡重明ほか著／同文館出版発行

『近江商人中井家の研究』
江頭恒治　著／雄山閣発行

『ニッポン商人の誕生』
邦光史郎　著／有斐閣発行

『ニッポン商人の黄金時代』
邦光史郎　著／有斐閣発行

『動乱を生きたニッポン商人』
邦光史郎　著／有斐閣発行

『近江商人』
井上政共　著／松桂堂発行

『近江商人の研究』
菅野和太郎　著／有斐閣発行

『近江商人』
江頭恒治　著／弘文堂発行

新連載

戦国の武将　蒲生氏郷と商人(あきんど)（1）

蒲生氏郷と日野商人の発祥

瀬川欣一

滋賀県の湖東地域から輩出し、江戸時代から昭和初期までの長い歴史の期間、独特な商業形態を継承しながら全国各地へ商圏を広げて、大小さまざまな企業活動をしつつ、本拠地での大きな財を成していった商人達を、一般的には近江商人と呼ばれております。

それらの近江商人達の、出身地であり本拠地であった地域を大まかに三つに分けて、発祥の歴史や活動地や、経営形態においても少しずつの違いがあることから、近江商人の中の、八幡商人、日野商人、五個荘商人という出身地域別の呼ばれ方がしておりました。八幡商人が現在の近江八幡市。日野商人が蒲生郡日野町と蒲生町の一部。五個荘商人が神崎郡五個荘町とその周辺を指します。

これら湖東の各地から出た商人達は、商い(あきない)の場所を全て近江以外の他国に求め、その他国へ活動の拠点であるお店(たな)を設け、そこで働く従業員の殆どを出身地である同郷人の男達で占め、妻子などの家族は、従業員のそれをも含めて全てを故郷である近江の本拠地に住まわせるという、全国的にも近江商人のみの大変めずらしい商業形態と、生涯での生活形態をとり続けておりました。

そんな三つの地域別による近江商人の中の日野商人、つまり、現在の日野町全体と蒲生町の一部から出て、主として関東各地を中心に盛んな活動をした歴史の根源は、中世の頃にこの地域の領主であった蒲生氏の、その頃ではめずらしい商工業保護政策という、領国経営のあり方にその起因があったと思われます。とりわけ、戦国武将としての名も高かった蒲生氏郷（一五五六～九五）の、卓越した城下町経営が、その後に続く日野商人を生んでいく原因となっていったと考えられます。

では、日野における近江商人発祥に大きな影響を及ぼした蒲生氏郷とは、一体どんな人物であったのかを探ることにしましょう。

信長に学んだ城下町づくり

その城下町に楽市楽座の制度をいち早く取り入れ、現在の大商業都市である三重県松阪市を造り、更に東北福島県の会津若松市を造り上げ、九十二万七千石という大大名に栄達しながらも、四十歳という若さで病没した蒲生氏郷は、文にも武にも秀でた大層優れた大人物でした。

戦国時代の真っ只中である弘治二年（一五五六）に、日野城の城主である蒲生氏の嫡男として生まれた氏郷は、祖父定秀が新しく造り上げた城下町での商工業の活況を、肌で強く感じながら育ちました。その二十年ほど前に、全くの原野が縄張りされて出来上がった日野の城下町には、各種の商工業者が集団で軒を連ねる町々があり、日野市(いち)という市が毎日立ち、諸国から訪れる商人が町筋にあふれるという賑わいを見せておりました。城主の長男として育った少年氏郷は、商工業による城下町の活況を見て育ったのです。

こうした少年期に体得した商工業振興への意識を更に大きく高めさせたのは、氏郷が十三歳の時に、織田信長への人質として岐阜城へ送られ、直接に信長のもとで三年間を過ごしたことにありました。

永禄十一年（一五六八）九月、天下の覇者になるために満を持して入洛の機会を窺っていた信長は、将軍足利義昭を擁するという大義名分を得たことによって軍を進め、近江南国の守護職であった佐々木氏の観音寺山城を攻め、難なく攻め落としてしまいました。蒲生氏はこの佐々木の傘下に属していた一将だったものですから、信長の軍門に降るしるしとして、幼名を鶴千代と呼んでいた氏郷を人質として差し出しますので、以後の三年間を岐阜城で暮らすことになります。

この人質の身であった氏郷が信長の目に止まったのです。

この時期、破竹の勢いであった信長のもとへは、各地の武将から多くの人質達が岐阜城へ送られていたに違いありません。そんな人質である少年達の中で、氏郷が一きわ優れた少年であることを見抜いた信長は、将来、自分が進める天下布武の一翼を担わすに足る少年だと見込んで、重臣に命じて氏郷へ、軍学は申すに及ばす漢字や儒学な

ど、あらゆることを学ばすように命じました。岐阜の城下町ではすでに楽市楽座の制度が布かれていて、貨幣経済による流通社会が大活況を見せておりましたので、そんな、全くの新しい城下町経営のあり方も学ぶことができました。

若き日野城主の商工業振興策

翌永禄十二年（一五六九）。氏郷、十四歳の初陣です。南伊勢の北畠氏を攻める信長の軍に加わった氏郷は、少年にしては思いも寄らない程の手柄を挙げ、総大将の信長からも大層なお誉めの言葉を貰いました。

初陣にしてのこの見事な戦功に信長の期待は更に膨らみ、その後に日を置かずして、信長自身が元服親になって十四歳の氏郷を元服させ、その翌年十五歳になった氏郷へ自分の娘である冬姫を娶わせて、人質という身分を解き、父蒲生賢秀のいる日野城へと送り届けたのでした。こうして時の最もの権力者である織田信長が、氏郷にとっての岳父となったのです。

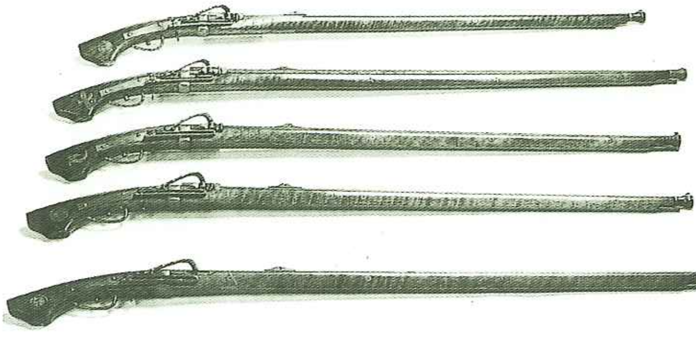
父の賢秀も今は信長を主と仰ぐ身である以上、信長から特別の目を掛けられて、冬姫までも自分の子息に賜わるという破格の扱いに感激し、その二・三年後に城主の座を氏郷に譲りました。こうして二十歳を待たずして氏郷は、六万石の領主と日野城の若き城主となるのでした。

日野町に建つ蒲生氏郷の銅像

だが、永禄・元亀・天正と年号が続くこの頃は、信長の天下統一をめざす近江での合戦が最も激しい時期です。腰を落ち着けて城下町経営をしている暇もありません。明けても暮れてもというほどに、各地の戦場を駆けめぐる氏郷であり、そうしたどの合戦においても自らが先頭に立って戦うという、実に勇猛果敢な戦いぶりを見せる氏郷でした。

湖北にある小谷城の合戦で浅井氏が滅亡して、近江での大規模な合戦は一応終わったものの、あの有名な武田氏との対立である長篠合戦や、隣国である伊賀攻めまでの間は、日野城でゆっくりと過ごすこともできない状態となっていました。

天正四年（一五七六）になって信長は安土城の築城を始めます。氏郷二十一歳。安土の地から近い日野城にいて、築城のための資材調達、人夫繰り出し等々の大きな協力をしながら、城下町での商工業振興策をいよいよ開始し、その頃の新兵器であった鉄砲の大量生産へ特に力を注いでいきました。その鉄砲が日野鉄砲であり、湖北の国友村で生産された国友鉄砲と共に、戦国末期の各国の武将へ大量に売られていくのでした。



戦国期、大量に生産された日野鉄砲

こうして氏郷は岳父信長の政策を忠実に見習って、城下町日野を完全な楽市楽座にするための十二か条からなる掟（おきて）を下します。

その第一条には、「当町楽売楽買と成す上は、諸座諸役、一切これあるべからざる事」と、座の制度による商品の流通を厳しく禁じ、蒲生氏領内の街道を商人が素通りすることを禁じて、商人達は必ず日野の町で一泊して、その持ち荷を日野市の場で商え、と指示しております。

しかも「当町、地子（じし）、加地子ともにこれあるべからざる事」としているように、商人などに課せられていた地子と呼ぶ一種の税金も、日野市の場で商う以上は、一切これを取らないとしているのですから、商人達にとってはこれ程に優遇された場所は他にありません。喧嘩や口論も、押し売りや押し買いなどの暴力沙汰も、その一切を領主が取り締まるという掟書（おきてがき）だったものですから、信長の居城が築城されている安土の城下町と並んで、日野の城下町は近江における近隣の二拠点と言われる程に、商と工を中軸とした大いなる賑わいの町となっていくのでした。

これが江戸時代に続く近江日野商人輩出の基礎となっていきます。

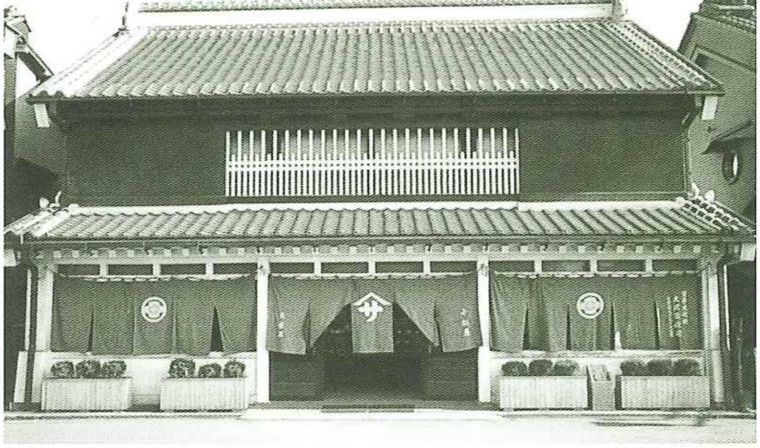
だが、そんな栄華も束の間の夢。天正十年（一五八二）本能寺の変で信長は自害。天下は羽柴秀吉の手に移り、その秀吉の命令によって氏郷は伊勢の松が島城へ国替えさせられ、松が島城から新しい松阪城を築いてから氏郷の商工業保護政策は、この松阪において更に花を開かせていくことになります。

（つづく）

近江商人活躍の舞台　その⑥　川越

小江戸「川越」の繁栄に貢献

江戸時代、荒川からの水路の発達で大きな繁栄をみせた埼玉県川越市。明治六年の大火で市内の多くの商店や民家が焼失したが、すぐさま復興し現在も当時の防火用設備の完備した蔵が立ち並び、往時の繁栄が偲ばれるまちづくりが展開されている。ここ川越にも近江商人がそのまちの繁栄に大きく貢献してきた足跡が残されている。



国の重要文化財旧近江屋半右衛門宅

近江商人が建てた大沢家住宅

三十余りのどっしりとした構えをみせる蔵の建ち並ぶ商店街で知られる川越。明治二十六年の市内の大半を焼失した火災の後、すぐさま現存する多くの蔵づくりの商店や民家が建設されたという。このことからも、当時の川越の商業の繁栄ぶりを伺うことができる。

現存する蔵づくりの民家の中でも、もっとも古い時代の建物で現在、国の重要文化財に指定されているのが「大沢家住宅」である。この建物は、寛政四年（一七九二）、呉服太物を扱っていた川越の豪商近江屋半右衛門（西村半右衛門）が店舗として建てた蔵づくりで間口六間、奥行四間半という町家としては大きな建物であり、明治の大火を免れ関東地方の町家としては古い時代のものであるといわれている。外観は簡素で、近年に大改修が行われている。現在の大沢家は、西村家から譲り受けて下駄などの小間物を扱う商人であり、現在は川越地方の民芸品やお土産を販売している。

「近長」の屋根瓦に㊂が残る（蔵づくり資料館）

この町家を建てた西村半右衛門は、近江商人で、明治十六年に発行された「川越繁昌店萬代鏡」では筆頭に名を連ねており、埼玉県で最初に設立された第八十五国立銀行の発起人にも名前がみえる。服部民俗資料館の服部新介氏は「江戸から川越に移り住んだ近江商人が、呼び寄せたりまたは、血縁を頼って川越に出掛けてきたのでしょう。近江商人は血縁を大事にしていましたから。それにしても圧倒的に太物商が多い」と話される。

川越繁昌店萬代鏡

近江屋の名が多い「川越繁昌店萬代鏡」

市の指定文化財の「近常」

九十九麻屋に百近江屋

服部氏のお話では、西村半右衛門家の屋印は㊀であり、現存する食料品店「近長」は㊂の屋印である。一から順に二、三と分家しているという。この近長

さんは、川越のランドマークである「時の鐘」の前にそば屋、さかな屋が同じ「きんちょう」を名乗っておられ、親戚関係にあるという。蔵づくりのまちなみには、いまも「近江屋」の名残が随所に見られるが、明治半ば以降に鉄道が通らない川越の商人勢力は大きく様変わりし、具体的な近江商人の活躍の様子は資料としても何も残ってはいない。かつて、麻屋という屋号が多かったが、それよりもさらに「近江屋」が多く存在し、「九十九麻屋に百近江屋」といわれた事実も人びとの記憶から薄れているようである。

「蔵のまち資料館」に残る㊂の屋印のある鬼瓦が、静かに、かつての近江商人たちの活躍ぶりを語りかけているようであった。

日野商人の醸造業の伝統が残る茨城に

全国で29番目の滋賀県人会が誕生

設立総会では 深井陽一郎氏が会長に選任

日立化成　名誉相談役の高木正氏の呼びかけで、茨城滋賀県人会が発足し、去る平成十年七月五日に水戸市ホテルシーズンで、日立系列の社員の方々が中心となって、設立総会が開催されました。当日の設立総会には、AKINDO委員会からも五名が参加し、茨城滋賀県人会との交流を深めることができました。

設立総会では会長に深井陽一郎氏を選任し、当日出席者の自己紹介が行われ、今後の県人会の活動計画などの説明、さらに会員増をはかっていく方向が示されました。

茨城滋賀県人会の会員の中には、昭和二十六年に甲賀郡水口町から鈍行列車で上京し、丁稚奉公から始めたという太田為男さんが、当時の状況をしみじみとお話されていたのが、印象的でした。

現存する酒造会社

近江商人の関東における醸造業経営は驚くべき盛大であり、とくに日野商人によるものが多くみられます。埼玉県、栃木県、群馬県にも多くの近江商人が創業した醸造会社が現存していますが、茨城県では、蒲生町鋳物師(いもじ)出身の日野商人竹村茂兵衛を祖とする水海道市の株式会社竹村酒造店や、天明年間に創業した真壁町の株式会社西岡本店、同じく真壁町の村井醸造株式会社や来福酒造株式会社があり、県内では結城市や下館市などにも日野商人の創業した醸造会社が現存しています。

茨城県の現況と滋賀県との関係

かつて近江商人が多く出かけ、地域の産業振興に大きな影響を及ぼしましたが、幕末には、開国をめぐって彦根藩と水戸藩の対立があり、一時は両県の関係には微妙なものがありました。しかし、その後、昭和四十三年には水戸市と彦根市の間に友好親善都市が締結されるなど、安定した交流が続いています。

現在の茨城県は、地方都市としての風格を持つ水戸市、古くからの企業城下町としての日立市、日本で初めて原子力の火が灯った東海村、整備が進む新しい筑波研究学園都市など、さまざまな顔を持っています。

県南部は筑波研究学園都市などの新しいまちづくりが進み、東京へ通勤する人も多いのですが、県全域には、農業地域的な雰囲気が多く残り、農家戸数は全国一位の一二万戸で、高い農業生産高を誇っています。

一昨年には第六回の世界湖沼会議が筑波大学を中心として開催され、滋賀県と同様に霞ケ浦という日本第二の大きな湖を有する茨城県は、深刻な水質汚染が大きな問題となっています。

近江商人の金言名句 ⑩

海上積金と名目金

リスク管理の巧拙が経営の命運を決定するのは、今も昔も変わらないが、近江商人はさまざまなリスク対策を講じている。彼らは千石船による海上輸送を利用したが、海上輸送は海難が付き物であり、仲間を募って「海上積金」を設けた。今日の海上保険制度により海難リスクの補填を図ったのである。また、諸国産物回しは相当な資金を必要としたが、資金調達方法として、乗合（仲間）商内を編み出している。少ない自己資本を補うとともに資本投資のリスク分散を図り、才能ある者にビジネスチャンスを与え、持ち株に応じて利益を配分するという合理的組織は、今日ベンチャー企業の育成を目指す投資事業組合に通じるものと言える。

こうしたリスク管理体制は、信用リスク面でも徹底しており、正金貸という無担保貸付を厳禁し、「価不足之呑込質」（担保を超える貸付）は一切無用とする堅実経営に徹している。また、債権回収の保全を図るため、「名目金」を活用している。名目金とは大名等に資金を用立てる際、幕府や社寺に礼金（名目金）を納め、名目上の貸し主（名目主）に仕立て上げ資金を用立てた制度である。天領として栄えた八幡商人は、徳川御三家の一つ紀州家を名目主としたが、当時、紀州家は最も信用度の高い保証会社の一つであったと言える。

高島商人のふるさとへ

『近江商人ふるさと探訪ウォーク』開催

全国をかけ巡り、わが国商業の礎を築いた「近江商人」。その優れた〃知恵〃は現代にも通じる大きな示唆と教訓に満ちています。偉大な先達「近江商人」を輩出した地を訪ね、その偉業をより多くの方々に知っていただくと共に、その足跡に触れ、理解を深めていただくことを期待して、『近江商人ふるさと探訪ウォーク』を開催します。

本年は、東北を中心として活躍した高島商人発祥の地の探訪ウォークを企画しました。

【日時・場所】平成10年10月24日(土)〈日帰り〉
滋賀県高島郡高島町勝野とその周辺

【内　　容】講演会と「高島商人」発祥の地を巡る探訪ウォーク

【主　　催】滋賀県・AKINDO委員会

【募集定員】一〇〇人（応募多数の場合は抽選により参加者を決定します）

【参 加 費】一、五〇〇円〈昼食代、諸費用含む〉
（オプション行程参加希望者は別途実費が必要）

【共　　催】高島町商工会・高島町観光協会

【後　　援】滋賀県教育委員会・高島町教育委員会

【お問い合わせ】〒五二〇－〇〇四四　大津市京町四丁目一－一
滋賀県庁中小企業振興課内　AKINDO委員会事務局
（TEL）〇七七－五二三－四六四一
（FAX）〇七七－五二八－四八七七

城下町の面影の残る高島町勝野付近

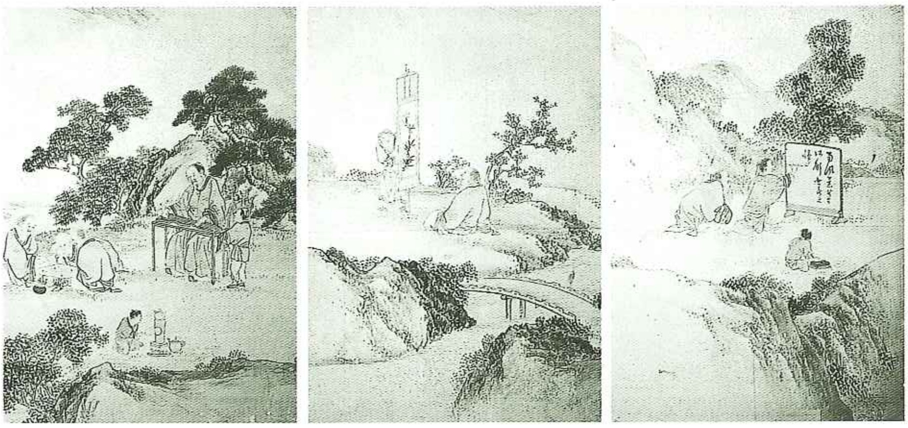
好評開催中

特別展「近江商人のたしなみ」

平成10年11月29日まで
近江商人郷土館にて

毎年好評の特別展が、湖東町近江商人郷土館で開催されています。本年は「近江商人のたしなみ」をテーマに、商いの外に自分自身の文化的素養をつけていったその過程が紹介されています。

大店の主人となった近江商人は交際範囲も広く深くなり、次代に文化的素養を身につける必要がありました。そしてまた、人間的魅力に富む商人のもとへは、画家・書家・儒家・俳諧師など学問・芸術に連なる人々が逗留し、商人たちは経済的な支援も行いました。今回の特別展は、丁吟に遺されている多くの書物や書画を展示し、大商人のたしなみの一端をうかがうことのできる企画となっています。



君子のたしなみを描いた襖絵

●場　所　近江商人郷土館
愛知郡湖東町小田刈473
TEL0749－45－0002
午前10時～午後4時　月曜休館

●入館料　一般500円　中・高生300円

てんびん棒

夏休みに『お上にたてつき候』を読んだ。権力を笠に商人を追い込んでいこうとする下級役人と、彼らの弱点を逆手にとって、商人の言い分を貫いていく八幡の町民の駆け引きが面白く、当時の八幡商人の財力の豊かさや、取引先の広さなどが手にとるように見えてくる著作である。

そして、この中には、権力と結託しないで商いをするという近江商人の特色も浮き彫りにされている。

本号では、近江商人に関する書籍の紹介を掲載したが、研究書の多くが絶版となり、入手できないものが多いという状況であるが、『お上にたてつき候』をはじめ、近年近江商人関係の書籍が少しずつ発刊されてきている。不況時に強いといわれる近江商人に対しての大きな関心があることも、こうした発刊の要因でもあろう。

平成三年のあきんどフォーラムの開催を受けて、設立されたAKINDO委員会では、さまざまな催しの開催を通じて、近江商人の顕彰やその理念の啓発を行ってきている。

委員会の目的は、先人の知恵を現代のまちづくりに生かすことにある。近江商人の「お助け普請」は、民間活力の典型であり、硬直化した行財政への期待が薄れる中、官民一体の体制づくりが急務であると思う。長浜の黒壁の成功例が何よりもこうした体制づくりの重要性を教えているように思えるが、どうであろうか。　（I）

第10号
■編集・発行／AKINDO会議　大津市京町四丁目一－一　AKINDO委員会内　TEL〇七七（五二三）四六四一